

第2班

中国近世・近代における生活・風俗の研究

(1) 共同研究員名

研究代表者：松浦智子

共同研究員：中林広一

客員研究員：鈴木陽一

研究協力者：山口建治 吉川良和 大木康 王京 巖明 張韜

(2) 研究目的

第四期の共同研究「第二期『東アジア生活絵引（中国江南編）』編纂のための基礎作業」にて取り組んだ活動をベースとしつつ、中国近世・近代における生活や風俗のあり方について検討を行う。検討に当たっては、「営業写真」を中心とした各種図像資料を中心に据えることとする。「営業写真」は『図画日報』に連載された作品であり、20世紀初頭の上海における様々な職業に絵・文をもって解説を加えたものである。多様な職業について細部まで表現した本作品は近代社会へと移行しつつあった当時の中国の生活・風俗を把握するには絶好の非文字資料であり、これを素材として行われる検討は中国社会の日常に対する私たちの理解を一層豊かなものへと導こう。

なお、検討に当たっては「営業写真」のキャプションの分析だけにとどまらず、各種絵画資料や写真資料との比較・検討も並行して行う。こうした作業を通じて、より正確な資料内容の把握が可能になると考え得る。

(3) 活動経過

上記の通り、本研究班では当初「営業写真」を中心とした検討を通じて、中国の生活・風俗に関する具体像を明らかにすべく作業を進めていたが、結果としてそれが叶わなかった。それは、「営業写真」が掲載された『図画日報』に関連して、それを扱う際の権利上の問題をクリアすることが難しいと判断されたことを理由とするものである。

この法的なハードルの高さは初年度の段階で判明したものであるが、その段階で関係者間での協議を進め、残りの研究期間を有効に活用すべく研究活動の方針を一部修正することとした。具体的には共同テーマとなる資料の設定を行わず、個々で図像資料を活用した個別研究を進めていく方針への修正である。その結果、方法論や作業工程において一部変更が生じざるを得なかったが、本来の目的である中国近世・近代の生活・風俗に関する検討自体は継続して行うことが可能であり、残りの研究期間においては着実に成果を積み重ねることができた。

この間の業績については（４）で触れることとするが、その基盤となる研究成果の検討や意見交換等は研究会を通じて行った。この３年間における研究会について主なものを以下に掲げておく。

○2020 年度

2021 年 2 月 19 日 吉川良和「画像にみる日中の近代化と演劇界」

2021 年 3 月 17 日 中林広一「横浜絵の中の中国」

○2021 年度

2021 年 7 月 28 日 中林広一「華僑の描き方・描かれ方」

2021 年 10 月 30 日 松浦智子「西遊記絵図本と明内府絵図本」

2021 年 12 月 18 日 大木康「蘇州版画」について」

2022 年 1 月 29 日 吉川良和「東アジアにおける目蓮説話の図像に関して」

○2022 年度

2022 年 12 月 19 日 吉川良和「わが国における目蓮説話の図像に関して」

2023 年 2 月 3 日 鈴木陽一「非文字資料をめぐって——資料の体系化からどこへ向かうべきか」

なお、上記の研究会は具体的な研究成果報告を行ったもののみ示しており、それ以外にも事務的なことを報告・検討する会合は行っているが、煩瑣を避けるためここでは割愛する。

周知の通り、2019 年以降、社会では新型コロナウイルスが蔓延し、かつ 2022 年度に至るまでその終息を見なかったことから、対面での研究会の実施は断念せざるを得なかった。ただし、Zoom での開催とはいえ、班の構成員の間で有意義な意見交換は行われ、研究内容の批判的検討や知見の共有なども対面の時と同様に積極的になされたと言える。

（４） 研究成果

本研究班の活動に関連して公刊された成果は下記の通りである。

大木康「画像資料から考える中国明清の歌唱文化」『明清江南社会文化史研究』汲古書院、2020

大木康『明清戯曲俗曲雑考』復旦大学出版社、2021

大木康『晚明風雅』香港城市大学出版社、2022

大木康「姜埰の顕彰活動——『姜貞毅先生輓章』をめぐって」『斯文』137、2022

大木康「香港石塘咀花街雑考」『東洋文化研究所紀要』182、2023

大木康「蘇州版画の光芒」展図録、海の見える杜美術館、2023

吉川良和「中国北宋の『楽書』と李朝朝鮮の『楽学軌範』における楽器初探——弦鳴楽器の絵図を主として」『人文学研究所報』63、2020

吉川良和「『大目鍵連間救母変文』の絵解き唱導初探」『人文学研究所報』69、2023

鈴木陽一「近代中国図像資料初探」『非文字資料研究』21、2020

中林広一「ヤヌスとしての写真」『非文字資料研究』21、2020

中林広一「江戸末期～明治期華僑関連絵画集成稿」『非文字資料研究』25、2022

松浦智子「日本における岳飛“文芸”の展開」『人文研究』203、2021

松浦智子「蘇州版画の光芒」展図録、海の見える杜美術館、2023

本研究班の活動を通じて明らかにし得たこととして、ここでは以下の諸点について挙げておく。

一点は図像史料と実際の芸能との関連性である。これについては上図下文形式をとる『仏説目連救母経』（南宋末成立）の絵図分析を行った吉川の検討に多くを依拠する。『東京夢華録』に、北宋末に『目連救母』雑劇が、七夕から盂蘭盆まで、毎日上演されていたとあるが、吉川は、その舞台姿が『目連救母経』の絵図から部分的に読み取れるのではないかとする立場から研究を進めた。この推測の根拠は、『救母経』の下文部分を分析した結果、それが絵解きの台本と認められたことによる。絵解きの聴衆となる人々は、当然主要な人物の共通イメージを、芝居などで持っていたはずであり、したがって、そこに描かれた人物と舞台のイメージについても、衣装も含めて、大きく乖離があるはずのないものと見なされる。

また、目連説話は、五代以前の説経台本と目されている敦煌変文に三種十二点も資料が伝世し、しかもそれらは絵解きのように絵図を示しながら語られたものであったであろうことは、文面から今日定説となっている。だが、具体的な絵図は失伝してみられない。しかも目連説話は地獄めぐりで有名であるが、敦煌に描かれた壁画には、金岡照光が指摘したように、一枚も地獄絵がない。もちろん、目連母子と目される絵図もない。そこで、吉川はペリオ文献に残っているわずかな敦煌絵図の中から、人物画、牛頭などの絵図を拾い出して、『目連救母経』の絵図と比較対照した。その成果は『救母経』以前の目連絵図の状況を把握することにつながるものである。

なお、作業において吉川は元代説唱『目連救母出離地獄生天』や明代万曆劇本『目連救母勸善戯文』の絵図を参考にしたが、これらは劇本類の挿絵であるため、役柄の扮装と各人物の描写が、『仏説救母経』から宋代の「目連救母」劇の人物像を想定する作業に役立つと考えられる。

このような関係性は他の図像史料からもうかがわれる。例えば、大木は蘇州版画と称される中国版画のコレクションにつき調査を行ったが、そこでは演劇と版画の深い関わりを明らかにしている。とりわけ『三国志演義』などの物語を題材にした版画では、歴史的人物の関羽が演劇の隈取り姿で描かれるなど、舞台上の演出を踏まえた表現がなされている。

以上の諸研究では、絵画に描かれた内容と現実の芸能との間にある関わりが検討された。これにより図像史料が物語の内容を補足する情報だけにとどまらず、現実の状況を推測する際の資料としても活用できるものであることが示され、そこから図像資料の持つ多面性をもうかがい知ることができた。

一方で、本研究班での検討においては、図像史料そのものの持つ限界も明らかにできた。要は、描かれた内容は必ずしも対象を写實的に描写したものとは限らず、むしろ描き手の意図が強く反映されているケースも多いということである。

これは中林が扱った横浜浮世絵や開化絵などに顕著である。横浜浮世絵や開化絵は一般的に風俗画と捉えられる向きもあるものの、実際には買い手のニーズを踏まえた上で描かれたフィクションであ

ったり、極端に誇張されたりする側面を持っていた。その意味では図像史料にも扱いに注意を要する部分があるが、これはある意味、描き手の心性や価値観・イデオロギーを読み取ることが可能な素材と位置付けることもできる。

吉川が扱った目連説話に関する絵解きの絵図もまた同様の性質を持つ図像史料として位置付けることができる。すなわち、制作者側の抱く宗教的価値観・イデオロギーを理解するための有効な資料としてこの絵図を分析することも可能であろう。

ところで、この絵図については、明代内府で制作された一群の絵図本とも連続性があり、松浦は明代内府の絵図本や視覚文化に関連して次のような検証を行った。まず明代初期から内府では、目連宝巻をはじめ仏道の手鈔彩絵経典が、時に刊本にもとづき複数つくられていた。こうした明代内府における彩絵本／絵図本の文化は明後期に至ると、民間の出版文化の隆盛の影響をうけさらに勢いを増していく。明後期の内府では、宗教的絵図本のみならず、明代後期に坊間で上梓された挿画本にもとづき、彩絵通俗娯楽小説や彩絵勸戒書や教科書なども複数制作されていた。

そして図像の資料的価値から注目されるのは、こうした娯楽小説や勸戒書がジャンルの枠を越えて絵図宗教経典とも相互に影響しながら制作・受容されていたということである。明後期に出現したこの現象からは、絵図などの視覚文化が、宗教、娯楽、教育などの枠を容易に乗り越え、人間の思考・価値観に影響を与え得る道具となっていた側面があったことを読み取れるだろう。

以上の内容は図像史料が単なる風俗史にまつわる資料にとどまるわけではなく、人間の内面に対する理解へと踏み込んでいくための導き手になっていることも示している。こうした表象にまつわる素材として図像史料を活用し、近世・近代の中国社会について知見を深めていく可能性にも議論を展開できたことは、本研究班の活動として特筆すべきものであると言えよう。

(5) 今後の課題と展望

本研究班での3年間の活動に関する評価は以下の通りにまとめられる。

まず、(3)でも触れたことであるが、共通のテーマとして「営業写真」という資料を設定したものの、権利上の問題をクリアできなかったことは大いに反省すべき点であろう。その原因としては研究班メンバーによる各種権利への理解及び権利上の問題クリアに向けた見通しの甘さが挙げられ、著作権のみを意識した対応をとれば良いわけではないことがこの機会を通じて痛感された。

一方で、以上のトラブルへの対応として、早い段階にて方針転換が図れたことは評価されうるものである。「営業写真」の代替となる資料、しかも権利上の制約を受けないものを探し当てることは容易ではなく、そこに拘泥することはいたずらに時間を浪費していたと考えられるが、思い切った決断を行えた結果として、構成員は一定の時間的余裕の中で研究を進めることができた。(3)や(4)で示したように、この研究期間にあって一定の成果を上げることができたことも上記の運営方針によるものであると言えるだろう。

以上のように本研究班の活動においては、当初の予定通り進められなかったこともあり、反省すべき点が多々見受けられる。一方で、各構成員の研究活動を通じて、中国近世・近代の生活・風俗に関する知見は深められたと言え、その意味では当初の目的を十分に達成させることができたものと見な

せるだろう。このテーマによる共同研究は今年度で終了となるが、今後、機会を見つけて研究のさらなる推進を図っていきたい。